

## ひとりは大切

本井 康博	同志社大学神学部教授
講師紹介【もとい・やすひろ】	【研究テーマ】 同志社の創立者、新島襄の思想（キリスト教信仰）と人物について

## 建築ラッシュ

新入生で賑わう同志社大学は、いま建築ラッシュです。

この京田辺にもローム記念館や情報メディア館、交隣館に続いて壮麗な夢告館やら光喜館が出来ました。今春竣工したこれら二館に、私はまだ一歩も足を踏み入れていない有様です。室町ですすでに寒梅館が威容を誇っておりますし、今出川ではクラーク記念館が修復工事中、新町では溪水館に続いて臨光館が現在、工事中です。岩倉では同志社小学校（大学付属）の新築が始まっています。

「眠れる獅子」と揶揄された同志社がようやく動き出しました。逆に「動き過ぎや」と叱られそうな勢いですね。

カリキュラム面でも「動き」があります。目玉のひとつが「同志社科目」群の設定です。本学は他学に先駆けて「日本の近代化と同志社」という自校史科目を導入しました。けれども、それ以上の規模で、今回、別の科目を設ける機運が盛り上がってきました。大学の生き残り策でもありますが、それ以上に同志社の独自性をより濃厚にするために、なんとか「同志社らしい」科目を、という発想から神学部教員を中心に立ち上げられました。同志社大学のアイデンティティを探るために新島襄、学園創立理念、そしてキリスト教の三本柱の基礎を学ぶための教科で、今月からスタートいたしました。

私の担当する教科も二科目が「同志社科目」群に組み込まれました。それで、春学期の登録者数が二科目とも一挙に去年の十数倍にもなる、という思わぬ「椿事」が起きております。

## 出版ラッシュ

これに連動するかのようになり、一方で「新島本」の出版ラッシュです。四月に入ってこの一週間のうちに三冊、書店の店頭に出ました。

一冊目は、今日の『朝日新聞』朝刊一面に広告が出ましたが、太田雄三『新島襄』（ミネルヴァ書房）です。モンリオールのマクギル大学日本史教授の著作です。東大出身者で、同志社とは直接的な関係がない、という方です。

私はご本人から一冊いただきましたので、お礼のメールをカナダに打ちました。そうしたら、同志社サイドから読めば納得いかないところが少なからずあるのでは、といった旨の返事が来ました。したがってこれは学内でも話題になること必至の「問題作」、という予感がいたします。

店頭に出た残りの二冊は私の著作です。「同志社科目」のうち基礎科目として「建学精神とキリスト教」という科目が出来たのですが、そのテキストとして『新島襄と建学精神』（同志社大学出版部）を作成いたしました。いまひとつは、『新島襄の交遊－維新の元勳・先覚者たち』（思文閣出版）です。新島を「全国区」に売り出すという下心を抱いて書きました。

実はすでに次の「新島本」も校正（すでに三校）中で、六月には出したいと思っています。『千里の志－新島襄を語る（一）』（思文閣出版）という題の講演集です。

さらに秋には同志社創立百三十周年を記念して『新島襄の手紙』（岩波文庫）が出ます。総長を委員長とする編集委員会が作業中で、私もその一員です。すでに三十数回の委員会を開き、そろそろ初校の朱入れが終わるところです。

このように今、分かっているだけで、この一年に五冊も「新島本」が出ます。

## 「一人一人大切ナリ」

というわけで、新島襄の認知度がすこし上がってくれるのでは、と内心期待しております。加えて、この九月に臨光館が竣工すれば、今ある尋真館と渡り廊下でつながり、その壁面を新島の言葉で飾ります。

新町キャンパスに入ったら必ず目に付く場所ですから、「露出」効果は抜群ですね。彫られる文言は、「諸君ヨ、一人一人大切ナリ 新島襄」です。これは新島の式辞に出てくる言葉ですが、残念ながら自筆原稿は残っておりません。だから「良心碑」のように自筆の文字をそのまま拡大して、というわけには参りません。今回、代わりに書家の今井田緑苑さん（本学理工学研究所長、今井田豊教授の奥さまです）に揮毫していただきました。

文言選定は、鈴木直人教授（キリスト教文化センター所長）の発意です。さすが、という印象を受けます。実は、私にも相談がありましたので別の候補を挙げていたのですが、こちらは「落選」でした。鈴木案に負けた最大の理由は、「意味不明だから」と聞いています。

敗れたとはいえ、私自身も先の文言、「諸君ヨ」が気に入っております。だから数年前からこれを流行（はや）らせたくて、『現代語で読む新島襄』（丸善、二〇〇〇年）を編集した際には、ためらうことなくこれを収録いたしました（一八三―一八四頁）。今回、その効果が早くも上がった、と言えなくもありません。

それはともかく、私が推した文言は「TERRAS IRRADIANT」というアーモスト大学のモットー（校訓）でした。ラテン語です。だから、たしかに初めての方には「なんじゃ」と思われてしまいますね。「世を照らせ」といった意味です。アーモスト大学は新島の母校であり、同志社のモデル校のひとつですから、新島を記念する言葉に相応しい、と思ったのですが。駄目でした。いつか「リベンジ」を、と次の機会を狙っています。

## 創立十周年記念式

何れともあれ、「一人一人大切ナリ」という言葉は、今後これまでに（少なくとも学内では）「流通」するはずですよ。ですから、新島がこれに込めた意味をより深く理解していただくためにも、これが発せられた背景を今日、ご紹介するのはタイムリーかと思えます。

時は一八八五年、つまり創立十周年です。十二月十八日にそれを祝う式典が校内で行われました。時期が実際の創立記念日より二十日ほどずれているのは、校長の新島がアメリカから帰国するのを待って挙行了したからです。

場所は「運動場」です。たいてい、グラウンドと誤解されますが、実は体育館です。もちろん木造で、いまの同志社アーモスト館管理人住宅辺りにありました。J・D・デイヴィスは、参加者を数百人と記録していますが、これはまあ誇大でしょう。とてもそんなに大きな建物ではありませんから。

式は午後一時半に始まりました。この日の新島は朝から殺人的な忙しさですよ。式典ラッシュでしたから。まず午前十時にチャペルの定礎式、ついで十一時から書籍（しょじゃく）館（いまの有終館です）の定礎式です。それぞれ式辞を披露したあと、昼過ぎにこの創立式典が待ってありました。夜七時半にはさらにもうひとつの集会（これも体育館）が控えておりました。校長帰国歓迎会です。いずれも新島が主催者、もしくは主賓ですから、心と体が休まる間もありません。

## 校長式辞

これら四回にわたった式辞やあいさつは、幸いにも学生の広津友信が筆記してくれております。そのうち、今回の該当箇所を『現代語で読む新島襄』（一八四頁）から抜いてみます。

「過去のことを述べようとするばいろいろあるが、今日は論じない。また卒業生のことについてもいろいろあるが省略する。諸君とともに過去を追想して記念としたいのは、昨年私が【渡米で】不在中に同志社を退学させられた人々のことである」。

新島はいきなり「退学者」のことを式辞のマクラにしました。この種の式辞の冒頭には、まったく相応しくない話題です。普通の校長なら晴れの式典で学校の「不祥事」をことさら暴露するようなバカな真似はいたしません。知事を始め、来賓が居並ぶ場でですよ。新島は創業者なんですから、創立をめぐっての苦労や感謝を、多少の自慢話を織り交ぜてするのが、

常道というものでしょう。

けれども、そこが新島です。誰が見ても明らかなマイナス材料を自分から開示いたします。ピューリタンの規律の強い初期同志社にあって、数名の学生が一度に放校されたのは、もちろん初めてです。学園にとっては一大汚点です。けれども新島は、この不祥事を「逆転満塁本塁打」よろしく、見事に打ち返すのです。広津の筆記にはこうあります。

「ほんとうに彼らのためには涙を流さずにはいられない。彼らは真の道を聞き、真の学問をしていた人であったが、ついに退学させられることになった」。

広津はこれに補注して、「先生は涙を流し、胸をつまらせながら述べられたので、満場ひとりとして涙ぐまない者はなかった」と書き加えています。知事も涙したのでしょう。問題の発言はこの直後です。

「諸君よ、人ひとりは大切である。ひとりは大切である。過去はすでに過ぎたことなのでどうしようもない。しかし、今後については私たちはまことに用心深くありたいものである」。

つまり新島がここで言及した「ひとり」とは、ひとまず「退学者」を意味します。とりわけ五年生の林拾君を指すことは前にチャペル・アワーで「退学者に注ぐ涙―新島伝説を追う―」（一九九四年）と題してお話したことがあります。

さらに広津の筆記によれば、「諸君ヨ、一人一人大切ナリ」の後に「一人八大切ナリ」が続いていることが判明いたします。今回は長くなりすぎるので、この部分を壁面に彫るのは諦めた、とのことです。

## 在校生の回想

広津の筆記以外にも、新島の式辞を印象深く聞いた在校生が証言を残しています。たとえば、綱島佳吉（かきち）。やや不正確ですが、こうあります。

「明治十八年十一月【十二月の誤り】十八日に初めて同志社の十周年記念日を迎へ、東の運動場【体育館です】で盛んな式が挙行された。多くの弁士が代わる代わる感想や希望を述べて非常に盛大な式であったが、最後に新島先生が立って言われたことは、私は忘れることの出来ないものである。先生は立って、『今迄諸君は過去の思ひ出や将来の希望を述べられたが、私が一つ茲（ここ）に記念したいことがある。それはこの十年の間に同志社に來た学生の中、校則に背（そむ）いて退校された学生が数人あるが、折角同志社に來て中途落伍したそれらの人々の将来を想ひて、自分は彼等弱し落伍者を記念したい』と涙を出して述べられた」（『追悼集』二、三一―四頁、同志社社史資料室、一九八八年）。

今ひとり、山室軍平の場合、その記憶はもっと正確です。

「先生は要するに其（その）赤心を人の腹中に置かれる方である。創立十年の祝賀會に退学者の事を思ひ出され、彼等は今何処に在るだらうかと云って、ハラハラと涙を流された事などは、確かに先生が真実に熱誠あり、赤心を持った所の御人物であった事を物語って居るのであります」（同前四、三三―六頁）。

「彼らは今、どこにいるだろうか」と言っただけで涙した、という点は、広津メモにない記述ですが、おそらく印象的な言葉だけに聴衆に感動を与えたはずだ。

## 卒業生が見た新島襄

そもそも新島が生徒に向かう態度は、「一視同仁」、すなわち平等主義に貫かれています。この点に関しても生徒であった中山光五郎や露（つゆ）無（む）文治の証言があります（『新島先生記念集』二四四頁、七八頁）。たとえば後者はこう言います。

「先生は一人一人を尊重して、いかなる人に対しても決して之（これ）を輕蔑せられなかつた。一人の学生が見失はれると、我子の如く悲しみ痛み、其立（そのたち）帰ることを待（まち）望まれた」。

露無がその好例として挙げるのが、次のふたつの事例です。ひとつは「先生が杖を以て御自身の手をうち、生徒の罪を我が身に引請けて之（これ）を罰しなされしこと」、すなわち有名な「自責の杖」事件（一八八〇年）です。

そしていま一つ、挙げられているのが、「ある年の卒業式に【実は創立十周年記念式典ですが】、是（これ）まで退校せし学生の事を思ひ出で、今彼等は何処に在るか、と涙もろとも叫ばれたこと」なのです（同前七八頁）。ただ、「是まで」は「不在中」の記憶違いでしょう。

同じく山中百（はげむ）も新島の「一視同仁」振りについて「どんな不才不能の人をも信頼なされる」と回想しております（『追悼集』二、二四九頁）。「学生の名を一々記憶」していた、と回顧する卒業生（大宮季貞（すえさだ））もいます（同前二、二二―一頁）。

さらに三輪源造などは、在学中、往來でばったり新島に出会うと、「こちらが気づかぬ中に、先生の方から脱帽して挨拶をなさるに恐縮した事も少なくない」と語っております。「かういふ事は、全く総（す）べての人間を神の子として敬愛された先生の至情から自然に溢れたのであらう」と推測しています（『新島先生記念集』一〇〇頁）。

こうした新島の生徒観は、当然、他の教師にも感化を及ぼします。S・C・パートレットは、「先生はすべての者に対して平等の態度をとられ、いつも『あなた』といふ言葉を用ひてください、と私に言はれたことがありました」と述懐しています（『追悼集』四、二八〇頁）。

## 迷える一匹の子羊

以上見てまいりました教育者・新島の生徒観は、当然のことですが、新島は生徒を「神の子として敬愛された」と三輪が表現するように、キリスト教信仰にその根をもっておりま。新島が牧師であり、宣教師である事実に思い至りますと、おおよそ納得していただけるはずだ。

自身、牧師であった柏木義円（ぎえん）は、新島を追憶して、「一人々々を神が大御心にとめて下さる如く、先生も亦同志社の学生一人々々を心に留めて居玉ふた」と言っております。「矢張先生には一の迷羊をも追ひ玉ふキリストの心があつた」からです（『追悼集』三、三一九頁）。

そうなんです、イメージとして浮かんでくるのは、聖書に出てくる「良い羊飼ひ」です。「わたしは羊のために命を捨てる。わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも導かなければならない」（『ヨハネによる福音書』第一〇章一五―一六節）。

手元の九十九匹をそのまま置いてさえ、迷い出た一匹をあえて追い求める、それが新島の基本的スタンスです。

要するに新島が人間を見る視線は、神が創られた被造物ゆえに自分を含めてすべて平等、という大前提に立っております。彼の場合はさらに進んで、人の眼から見てむしろ劣ったと見える存在や失敗した者の方にこそ、より暖かい視線を注いでおります。

## 「小魚」も「大魚」も

そうした新島の姿勢に関して付言しますと、新島はある時、こう書き残しています。「私がもう一度教えることがあれば、クラス中でもっともできない学生にとくに注意を払うつもりだ。それができれば、私は教師として成功できると確信する」（『現代語で読む新島襄』一七九頁）。

この点は、卒業生（吉田清太郎）の次の証言とも符合しますから、単なる新島の願望ではなく、実際にその通り実践していたようです。

「新島先生は私共の級には、聖書の研究と米國史をもって居られたが、級中一番出来ないと思ふ様な人を非常二大事二せられた」（『創設期の同志社』二七六頁、同志社社史資料室、一九八六年）。

新島の生徒観をさらに究明するには、新島が「小魚（しょうぎょ）」と「大魚（たいぎょ）」という用語を用いていることが参考になります。新島が構想した同志社大学は、「深山大沢（だいたく）」が理想像であり、「深山大沢、龍蛇を生ず」が彼の愛唱句でした（拙著『千里の志』一二九頁、思文閣出版、二〇〇五年）。「我力校をして深山大沢之（の）如くになし」たい、と明言してもおります。その際、大沢においては「小魚も生長せしめ、大魚も自在二发育せしめ」ることが肝要です（『新島襄全集』四、三〇六頁）。

すなわち「種々之魚八大沢之中二大切二養呉レ候」という希望です（同前四、三〇四頁）。教師というのは、とかく「大魚」を偏愛し、「小魚」を切り捨てるという誘惑に陥りやすいものです。新島はそれを戒め、出来る生徒も出来ない生徒も「自在に」泳げる学園形成に努めました。

したがって、遺言でもこの点は改めて強調されております。「大魚」は「てき儻不羈（てきとうふき）」な青年、と言い換えられています。教職員に対して、彼らを「圧束」しないように、と警告しています。ともかく、新島自身は「氣骨ある青年」が大好きでしたし、彼らを決して型に嵌（は）めようとはしませんでした。

一方、「小魚」は、遺言では「同志社は隆なる二従ひ機械的の二流るゝの恐れあり。切に之（これ）を戒慎す可き事」が当たりましようか。将来、学校運営上、事務的に処理せざるをえなくなると、生徒の人格が無視されやすいことを懸念した文言ですね。その背景には、生徒一人ひとりを尊重するよりも「一山いくら」で処理してしまう危険性を予測していたのでしょう。

新島はあくまでも「小魚も大魚も」、とりわけ「小魚」をも含めて、「社員【教職員です】は生徒を鄭重に取り扱ふこと」を臨終の床で念願しました。

### 「ひとり」の重み

以上のことから、新島の「一人一人大切ナリ」発言の背景がおおよそ分かりいただけたと思います。けれども、話はこれだけで終わりません。新島が「ひとり」に拘（こだわ）る姿勢は意外に根が深いのです。

やや誇大に言いますと、新島の文明論は「ひとり」が起点です。新島は「一人ノ改新改良ハ遂ニ社会ノ改良ニ及フベシ」とか「一己人之改良カ社会ノ改良トナル」（『新島襄全集』二、六四頁、三六六頁）と断定しております。

すなわち、一国の近代化は個人の改良が出発点です。「各人ノ改良ヨリ社会ノ改良、政府ノ改良ニ及フ」というのです（同前二、一一七頁）。したがってここでは「ひとり」の重みは、きわめて重要視されております。

すべては「ひとり」からです。その基底には、「一人ノ衰頹ハ一國ノ衰頹ニ関リ、其一人ヲ救ニアリ、自由ヲ与ルニアリ」との信念がありました（同前一、四三五頁）。「一人一人君子トナラシメテハ、殖産、民権、国権等恰モ死ニ翼ヲ附スルカ如シ」です（同前一、四三四頁）。

こうして新島は、「一人ヲ決シテ見過シテナラス」と警告するにいたります（同前二、三一三頁）。「一人ヲ得、一人ト問答シ、一人ノ心ヲ開クハ伝道上大切ノ事ナリ」（同前）という姿勢は、単に伝道上の要点であるにとどまりません。広く一般的な社会改造にも通用するはずで

その場合、「ひとり」の中に、小さきものや弱きものが排除されずに包含されている、というのが新島の特徴です。

### 福沢諭吉との違い

こうした「ひとりを相手」とする姿勢は、「真ノ働キハ却テ一箇人ヲトク【説く】ニシカズ」（『新島襄全集』二、三一三頁）という信念に裏打ちされています。こうした点をもっともよく理解し、継承したのは、柏木義円でしょう。群馬県の安中（あんなか）という地方教会で質朴な住民を相手に地道な伝道に挺身した点ではまさに新島の忠実な教え子です。

柏木は恩師の特徴を「戸（と）毎（ごと）に説き、人毎（ひとごと）に諭（さと）す」やり方、と捉えました（『上毛教界月報』一六、一九〇〇年二月十九日）。そして、ここから福沢諭吉との相違を引き出します。

柏木はこう指摘いたします。福沢という人は「戸毎に説き、人毎に諭す」ようなやりかたはいたって迂遠な方法、と公言し、大勢を相手に制度や組織に頼んでひとからげに、あるいは機械的に社会を改造しようとする、と。実は、新島は「大勢ノ前ニアリ大喝（だいかつ）一声衆人ヲ驚スノ演説ヲ為スハ多ハ荒コナシナリ」と警戒しております（『新島襄全集』二、三一三頁）。

ここに新島と福沢との違いが明瞭に出ておりますね。新島から見れば、大勢の「大衆」を相手とする福沢のやり方は「荒コナシ」過ぎます。柏木が言うように、新島はあくまでも「ひとり」と向き合う。そして個々人の心霊を改変し、それを聖（きよ）め、高尚にするほかに、真正な文明社会に至る道はない、と考えました（『上毛教界月報』一六）。

新島の真意は、「飯糊ヲオスニ一粒ツヽヨリ衆粒ニ及フ」です（『新島襄全集』二、三一三頁）。糊を作るために米粒を一粒ずつ根気よく潰していく。「急がば回れ」です。一粒ずつ、一人ずつなんです。

ほんとうに「諸君ヨ、一人一人大切ナリ」の真意は深いのです。一年後に出す私の二冊目の講演集は、『ひとりは大切—新島襄を語る（二）—』という書名にしようとかから決めております。

二〇〇五年四月十四日 同志社スピリット・ウィーク「講演」記録